

---

# GAME（ゲーム）～神々の遊楽～

間入糺管

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゲーム  
GAME「神々の遊楽」

### 【Nコード】

N2128Y

### 【作者名】

間入糀管

### 【あらすじ】

主人公は今年の春、高校生となった。高校の寮に住むことになったが特に嫌という訳ではなく、ホームシックにもならなかった。しかしある日、実家に帰り、ノベルゲームをする。その時、主人公は「ゲームみたいに日常にも選択決とかがあれば、すっげー楽なんだけどな」と考え始める。

そしてその日の夜、おかしな夢を見る。変に思いながらも、朝起きてみると

？

## ブログ（前書き）

ブログ短っ！と思いながらの投稿。

許してくださいお願いします。できれば音で頂けたらな、と思います。

## ブローグ

（クソッ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイベントシーンに行けるんだ！）

この心の声を聞いただけでは、パソコンの前でノベルゲームをやっているように思えるだろう。だが、実際は違う。

青年には見えていた。青年の目の前に浮かぶゲームのような選択決が。それは青年にだけしか見えないものであった。

（この選択決か？いや早まるな。もしかしたらこっちの選択決かもしれない。それともこっち？ああ、もうっ！……そうだ！今日の事を思い出せば何か分かるかも！）

そう思いながら、青年は今日の事を思い出し始めた

## ブログ（後書き）

すぐに投稿します。頑張ります。

## 第一話 能力（前書き）

ふうーやっと投稿。まえがきって以外に書けること少ないですね。  
それでは一話目です。

## 第一話 能力

ジリリリリ ジリリリリ

目覚ましの音が鳴る。目覚ましの設定は5時半、どうやら朝みたいだ。俺こと立花<sup>たちばな いちじく</sup> 九は意外に早起きなのだ。

（ん？選択決か？）

起きる

起きない

寮から逃げる

（…………おい、なんだ。この選択肢。ふざけんじゃねえよ。なんだよ、寮から逃げるって！）

もちろん、皆さんなら起きる、を選択するだろう。だが

（むむ、悩むなあ。）

この選択決、最善と最悪、どちらに転ぶか分からない、という感じのものでできている。

まあ、時々選択肢が一つしかなかったり、全部最悪に事が転んだりするのだが。

さて、なぜ立花がここまで悩んでいるかは、一度だけ起きないを選択したとき、クラスで人気の女子が起こしに来た、という伝説があるからである。

「やっぱり……」

立花はそう言いながら目覚ましに顔を向けていた。その目覚ましは、起きた時と同じ時間のままだった。

「俺が選択決を選んでる間は時間はつごかないんだ。ならば！」

そう言いながら、立花は寝始める。

（うつしつしつ。それなら選択決を選ばず寝とけばいいんだよ。）

その時、ピツという音と共に、

起きる

起きない

寮から逃げる

勝手に選択決が選ばれていた事に気付かず………



「ふわあ、あ、あ、よく寝たあ。さて選択決をつ！？」

立花は虚空を驚きと絶望に満ちた顔でみつめる。

「ない！選<sub>セ</sub>択<sub>タク</sub>決<sub>ケツ</sub>がない！！いや大丈夫！我が眼前に出でよ！世界仰<sub>オホ</sub>天<sub>テン</sub>不思議<sub>フシギ</sub>パワ<sub>ワー</sub>！！」

だが出ない。

「ははは、嘘だろ……？ てことは、遅刻だあ ああああ！ 急いで学校に行かなければ！」

## 選 択 決

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そうだ、寮を出よう

「朝飯食べる時間ねえよ！ていうか、そうだ、京都行こう、的なノリで寮を出させようとすんなあああああああああA A A A A

あああああああああ！！」

途中悲鳴がアルファベットみたいな発音になったのは気にしない方針でいこうじゃないか！

「ん、そうだサボってしまえば。」

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そうだ、寮を出よう

学校なんてサボってしまえ！

「あれ？こんな選択肢あったか？ま、いいや。」

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そうだ、寮を出よう

学校なんてサボってしまえ！

「ふう、あの店うまかったな。隠れた名店ばかったし。」

俺は学校をサボり外に出てから時間は経ち、夜飯を食ったところだった。選択肢に目の前の店に入る、というのがあったので、選択してみたらかなり美味しい料理店だった。

「これからこの店行こうかな。」

そう思いながらいつも、学校に戻るルートとは違うルートで歩き出す。今日は、何故か遠回りして帰りたい気分だったのだ。

思えばこの時、選択決が出ていたのに気にせずこちらに行ってしまったのが人生の転機だったのかもしれない。

## 選 択 決

いつものルートで帰る

寄り道しながら帰る

いつものルート 寄り道のルーも嫌な予感がすルから違うル  
と

?  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?

遠？りしな？ら？ろ？

[illegible]

「プハあつ。美味しい。やっぱりコーヒーはブラックに限るよなあ。」

立花はケータイをいじくりながらコーヒーを飲み、その上いつもとは全く違うルートを歩いていた。

人間頑張れば3個の事を同時にできるものなのだ。立花はつまらないことに頑張っているが。

立花はいつもと全く違うルートを歩き始めた時、重要な事に気がついた。それは、寮までの道筋が分からない、ということだった。その事に気がついた立花はケータイをとりだし、急いで地図を開いてそれを見ながら歩いているのだ。

そして、途中で見つけた自動販売機で買ったコーヒーを飲み、今に

至る。

「それにしても、ほんっと選択決様様だよな。道を間違いかけたら選択決が出るしさ。最高だよもう。」

そう言いながら首をかしげ、手を肩の高さまで上げた。

その時、突如頭の真横を、ゴウツ！と音を立てた明るいナニカが通り過ぎて行った。

「アツレエ？ゴメンネエ。君二当てようト、そたわけジャ、ないんだけどねエ。」

「おい！また口調がおかしくなってる！ていうかなんだ、そたわけジャって！」

声をかけてきたのは褐色の肌の色をした、亜麻色の長い髪の二十歳くらいの女と、最初にゴメンネエ、といって来、た………？

（おいおいお、おの数が一つ多かったような気もするがなんだアレは！？コスプレか？コスプレですか！コスプレなんですか！？）

その男は、ファンタジーを夢見る者なら一度は見たことがあるような、長い耳がついていた。

「え……エル、フ………？」

「ソ、エロフ。僕の種族はエロフだよン。」

「エロフって言うんじゃない！ちよっとアレな種族になるだろう。」

「アレッてナニさ？アレって」

「え？あ、アレはその……あれだ、あれ。」

「あれじゃ分からないヨ。アレじゃ。」

「つまりだな、ああ〜もう！アレはアレなのだ！だからもうあれでいいんだ！」

「コレ、何て言うんだっけ？ツンデレ？いや、ヨク使ってるけどソレデハないな。じゃ、なんだろう。」

「あ、あの？」

「ん？ああ、君がそういえばイタね。」

「ちよつと！アンタがイタね、って言ったから私までイタね、になつてでしょうがぁ〜！」

「知らないヨ！ソソコト！」

「アンタ今日帰ったら日本語猛特訓！能力使ってやるわよ！」

「エツ？チヨツ、オマツ（笑）」

「……………」

「どうかした？おーい……………ねえ聞いてる？」

「ああもうっ。そんなことよりアイツ、始末するわよ。」

「オーケエ。」

「「っーわけで死んで？」」

「何がっーわけだ！」

「イイから死んでヨ。アソコの人みたいに、さ。」

そう言いながら、エルフの人は俺の後ろの方を指差した。

「そ、そ。」

え？あそこの人？

そう思いながら後ろを見ると

「ひっ」

そこには、火で燃やされている、人間の首があった。

「あ、あああ……………」

無意識に俺は首からもエルフの人たちからも遠ざかっていた。

「イヤア、僕たちもサ、神々のGAMEに生き残りたくつてさア。  
能力者、殺そうとしたんだけど……………ソイツ、自分の能力の気付いてなクツてサ、簡単二逃げてるトコロを魔法で一発ドカン、とね。」  
「そう、そしたらすぐ死んじやったわ。」  
「君も能力気付いてないのかな。」

能力…………？なんだそれ。俺しらねえよそんなの。ていうか、魔法つてなんだよ。魔法はファンタジーの中だけの特権のはずだろ……………  
ハハハ、ハハ、ハハハハハハ  
人間、ここまでヤバいと笑えてくるもんなんだな。まあいい。逃げてもヤツが言うことが本当なら魔法にやられるだけだ。それならここで潔く死の

「……………ちよつと、まて……………」

「ハイ？」

「なっ」

ちよつと、まて

どうして俺は奴らの言葉を信じる。神々のゲーム？なにそれ、おいしいの？な感じだよ。魔法？ただの電波かもしれない。エルフ？た



だのコスプレかもしれないだろ、んなもん。

なら、何故だ？俺は特段不思議パワーは何も持っていない。それこそ  
仰天するようななんてあったら、俺自分で自分を疑

仰天？不思議、パワー……………？

どこかで聞き覚えが……………！！！！

『ない！選択決がない！！』

違うここじゃないその次だ。

『いや大丈夫！我が眼前に出でよ！世界仰天不思議パワー！！』

あつた！

そくだよあるじゃないか。俺にだって不思議パワーが。電波なアレが！

「ク、ククククク」

「今度はドウしたんでしょいういか。」

「しょういかって何？まあ、どうせ怖さとかで狂ったんじゃないの？」

「狂った？ハハまさか。」

「「！！」」

「ああ、そうかもしれない。GAMEとか意味不明だけどさ。俺は能力もってんのかもしんない。」

だからさ。もういいだろ？いい加減出してくれよ、選択決を。今危機的状況なの、分かる？分かるよね。だからマジで出してよ。もう俺GAMEとかのなんかでいいからさ。

## 選択決

自分で頑張つて倒す。  
すばやく逃げる。  
石を投げて逃げる。

クソ、いいのが全然ねえ！

（クソッ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイベントシーンに行けるんだ！）



「え？」

おい、ちょっと待てよ。なんで勝手に選ばれてんだよ。おかしいだろ！でも何で、何でさっきまでなかった選択決があるんだ。

「まあ何もナイミタイだし殺しちゃオウか。んじゃ行くヨ？精々避けテ逃げテ泣いテ喚いテ騒いでね？D？p l o i e m e n t d e  
陣 l' ? q u i p e 展開 m a g i q u e — B e r l i n H a u p t  
イヤーボール b a h n h o f ! !  
「ヤツベ！」

エルフが意味不明な言葉の後にファイヤーボール言ってから、エルフが前に突き出した手のひらには、アニメなんかでよく見る魔法陣が回っていた。すると魔法陣から大人の顔より少しでかいくらいの火の玉ができていて、それを俺に向かつて！！

だがその瞬間突風がエルフと俺の間で起こる。  
その次に見たのは

「あ……………」

闇だった。

黒い帽子に漆黒のマント、黒い、なんだ？あれ。変な模様が入った鎧と革鎧が合わさったようなもの。そして下も同じような感じ。靴

は黒いブーツのようなもので、すね当たりに折りたたまれた漆黒の羽があった。

「そこまでだ、アルス。」

「おや、魔法剣士ノ。」

どうやら声を聞くと女性のようだった。

「どうやら戦うしかないようデスね。」

「当たり前だ。」

「それでは本気を出しますか。大地にSomeil dans la  
眠りしterreet de si 大精grands esprits !  
空にDormir dans le 眠りしciel et 大telle me  
精nt grand Genie ! D? ploiment de  
陣l' ? quipe magique ! 行け !  
魔法「フン、D? ploiment de l' ? quipe ma  
展開gique—Renforcement 《身体強化》 du co  
rps」

するところだけが嵐に包まれた。しかし、すぐに青白い光に消された。その青白い光は女性の体から発せられている。だがこれだけは分かった。自分は助かったのだと。あの女性が殺しに来るかもしれないが、一時的に危機は回避できたのだと。

（あれ？安心した、ら意識……が……）

そして俺は、殺されるかもしれないという恐怖と不安に包まれなが

ら意識を手放していった。

## 第一話 能力（後書き）

がんばるぜいーちよーがんばるぜいーだから見捨てないでください  
おねがいます今アナタが私を見捨ててしまった場合呪われますが  
よろしいのですか？えそんなことをいわれたから逆に見捨てる？そ  
んなぁー！神は死んだ！

というわけです。見捨てないでくださいお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128y/>

---

GAME（ゲーム）～神々の遊楽～

2011年11月7日14時04分発行